

日本財団
2022 年度 子どもの居場所
報告書

フリースクール地球子屋
拠点名「地球子屋」

作成者 加藤 千尋

作成日 2023 年 3 月 31 日

はじめに

フリースクール地球子屋は、もともと 1996 年に保護者が中心となった子どもの居場所と学びの場所である。

子どもたちの居場所とは、どのような場所であるべきかを模索してきた歴史は、日本社会においても初期段階であったように思う。

その当時、日本社会では市民がつくる学校ブームがあり、子どもたちの中に発達に課題がある子どもがいることがようやく認知し始めたころであった。まだまだ学校へ行くことが当たり前で、学校に行かないことを肯定できる大人はかなりの少数派であった。

そんな中において、子どもを家庭に代わって預かり育てていく居場所というところが本当に必要なものなのかどうか常に自問自答しながら今日まで至っている。

子どもが健全に育つためには、学校生活、職場生活のような所属する場だけではなく、本来のありのままの自分を受け止めてもらえるような場所が必要であると考えている。成長過程にある子どもは、学校や職場などその場その場に応じた顔を使い分けるようなところではなくて、安全に安心できてありのままの自分が出せる場があることが重要だと思うからである。かつては、それが家庭であり、近所の地域社会もそのような場であった。

ところが地域社会は希薄化していき、安全・安心できる場が喪失してしまったし、家庭内においても本来の自分が出せない環境にある子どもが増えてきている。これでは緊張状態が続いて、自律神経がおかしくなっても仕方のないことではないだろうか。

そのおかしい状態になってしまった子どもを本来の姿に戻す場所こそ、子どもの居場所であり、それは治療にも似たような性質があるものの決して病院などではできないことである。

フリースクール地球子屋は、日本財団からの支援を受けたことで改めて子どもの居場所の意義について考えなおすきっかけを頂いた。

初年度は、子どもたちとの関係や活動を見直してこれまで以上の成果を生み出すことができた。改めて支援いただいた日本財団そして熊本市には感謝の意を表する。

フリースクール地球子屋
代表 加藤千尋

この報告書は、3つのパートに分かれている。

1) 居場所活動と子ども達の様子

月ごとに居場所内での象徴的な活動を紹介し、その様子を報告している。

2) 子どもたちの変化

居場所に通う子どもたちにどのような変化があったのか、代表的な子どものケースを小学生編と中学生編に分けて報告している。

3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていくにあたり、保護者や学校とどのように連携しているのかを簡単に報告している。

この報告書は、当団体の取組の記録として、また子どもの居場所活動をされている団体へのヒントとなることを願って作成いたしました。ご参考になれば幸いです。

1) 居場所活動と子ども達の様子

〇4月

コロナ禍がまだ収まりきれない中において、2022年度から熊本市における子どもの居場所の事業所として活動を行うことを法人役員で確認する。

子どもの居場所として改めて開所する日を5月9日(月)とした。

もともとフリースクール地球子屋は、学校に行けない・行かない(不登校)の子どもたちの居場所と学びの場として機能していたことから、概ねその機能的な部分は子どもの居場所事業へと引き継ぐこととし、今後は不登校に限らず居場所として活用したい子どもとご家族のために活動範囲を広げる。

事業方針の転換を周知するために、熊本市子ども政策課、保健子ども課、教育委員会、子ども若者総合相談センター、教育相談室、児童相談所、子ども発達支援センター、ひきこもり支援センターなど公的関連機関、支援機関へ開所と今後の連携・協力を要請した。

子どもたちは、前年度から引き続き来所している子を中心に、レクスポーツとしてバドミントン活動を4回実施し仲間づくりをした。(子どもの居場所事業のプレイベントとして位置づけている)

開所を告知したチラシを作製し、近隣学校や関係各所へ配布を行った。

日本財団「子どもの居場所」事業 熊本市と協業を結んだ民間取り組みです!

ちょっとお喋りしたいけど・・・
ちょっと寝たいけど・・・
ちょっと機嫌が落ちたけど・・・
ちょっと教えてほしいけど・・・
ちょっと遊びたいけど・・・
ちょっとゆっくりしたいけど・・・
ちょっとこまごまと・・・

子どもの「ちょっと」を受け止めるあなたの居場所
15歳までの子どもとご家族にあっての笑顔づくり安心基地
「てらこや」

〇どんな思いで「てらこや」をつくったの?
熊本市内の子供たちが通ってほしい場所!今の子どもたちは、一人ひとりが様々な困難を抱えています。市には対応が難しい子どももいるかもしれません。どんな子どもも学校や家庭だけでなく、地域のいろいろな大人とつながりあって、愛情を感じて育ちながら生きてほしい。私たちも頑張っています。しかし誰かに出会ってほしい。不安を感じるときはいつでも受け止めてくれる場所です。
私たちは、熊本市、日本財団、三喜園から結んだ公的連携事業としてこれまでもありふらなってきた子どもの居場所を拡充して元気にする、異年齢が交わる子どもの居場所をつくりたい。小人数、非営利で継続可能な人々が一緒に育ちあえる場所。現在、利用者を募集中です!
<募集対象>
小学生 4~5人程度
小学生 4~5人程度
中学生 4~5人程度

〇一日(平日 月~金)の活動例
12時 開所~健康相談
13時 活動 絵に勉強活動①(学校が得意な場合)
~14時 活動 歌・ダンス、書画、お話し体験
「ミニミニ」プログラム、習字活動など
※学校の宿題・おしゃべりタイム
15時 おやつ・自由遊び
16時 読書など
17時 活動 絵に勉強活動②
18時 活動 歌・ダンス、お話し体験、書画
レクリエーション、ARプログラム、書画
18時半 夕飯補助・支援(希望者のみ)
19時 閉所
<利用料全額>※政府の経済的支援(補助)が実施される
基本料5,000円(950円/月/費)
オプション:改修(150円/月)、食費(200円/月)
個別学習支援(200円/月)、修繕支援(200円/月)

子どもの「ちょっと」を応援!15歳までの子どもが利用できる居場所
2022年5月「てらこや」開所記念イベント

5月28日(土)11時~15時
第1弾 タコ焼きパーティー
みんなで作って食べよう

6月4日(土)11時~15時
第2弾 てらこや実店舗体験
みんなが話そう

6月11日(土)11時~15時
第3弾 世界のボードゲーム体験
みんながゲームを楽しもう
場所:フリースクール地球子屋

子どもの居場所「てらこや」イベントへ来てあげませんか?
暑い夏、暑が過ぎる前、ぜひ居場所がほしい。今の子どもは必要以上にストレスや悩みを抱えています。子ども時代には、異年齢の子どもと自然な生活体験を積み重ねるペースを大切に過ごしてほしい。安全な場所を持つことで、自分から関わり始める機会がきます。そして地域の信頼のある大人と交わる機会も自然に訪れます。ぜひイベントに参加して「てらこや」にならなうませんか?

〇私たちは、NPO法人フリースクール地球子屋 6年
1996年から学校に行けない・行かない(不登校)の子どもたちの居場所、学びの場として保護者や子どもの専門家が集まり運営してきました。
21年間、様々な子どもに出会う中で今年5月より地域の子どもも居場所をつくりたい。子どもも気軽な体験を通して、興味関心を広げたり人間関係の作り方を身につけてほしい。子どもの時代を安全・安心に過ごしてほしいと願っています。

〇「てらこや」でどんなことをするの?
楽しいイベント
おしゃべり体験
ARプログラムに挑戦
レクリエーション
英語で話そう

〇問合せ・応募先 NPO法人フリースクール地球子屋 担当:加藤千尋 (電話:080-2486-2999)
メール:freeschoolterakoya@gmail.com 場所:〒860-0854 熊本市中央区東子飼町3-5(子飼商店街沿い)
参加申込欄(5/28・6/4・6/11)参加希望日に〇して下さい。

保護者氏名:	連絡先番号:		
参加者氏名:	学校名・学年	学校	年

5月

GW後の5月9日(月)から子どもの居場所「地球子屋」として開所した。

ここの特徴は、小学校低学年から高校生までの年齢幅があり、また様々な発達課題などがあったり、学校での辛い体験を引きずっていたりと複雑な子どもが集まる場所である。

こういった子ども達の特徴として、人間関係づくりが上手くいかない子どもが多いことである。それ以前に体調が不安定な子どもも多数おり、毎日の生活の中で居場所として過ごすことが難しい。

毎日、この居場所に居ることが前提なのではなく、計画がなかなか機能しづらいこともあるが、「今、ここ」にいるという一期一会に近い感覚の中で活動を展開していくことになる。

活動の柱となるのは、アナログゲーム・カードゲームを通したコミュニケーショントレーニング、レクリエーションスポーツによる体力づくり・体調保全、生きるために自ら手を動かし食をつくる食育活動、商店街の特性として3か月に1回開催される「100円笑店」への出店による社会とのつながりづくりである。

子どもたちは年齢も特性もバラバラながら小さな目標に向かって協力し、お互いにできることを補いながら活動を行った。

○開所イベント 食育「たこ焼きパーティ」



レクスポーツ「バドミントン」



コミュニケーションを育てる アナログゲーム



6月

フリースクール地球子屋は、子飼商店街の空き店舗を活用していたことから、子飼商店街組合に所属して地域の商店街活動と連携している。

子飼商店街では様々な取り組みがなされる中、「100円笑店街」は3か月に1度開催され、そこで扱われる商品はすべて100円であることから好評であった。

フリースクール地球子屋も賛同し、100円笑店街へ参加ことにした。とはいえ普段は居場所として活動しており売るものがない。そこで子どもたちと話し合い、「100円チャレンジゲーム」として出店することとした。

「100円チャレンジゲーム」とは、「輪投げ」「ゴム鉄砲による射的」「スーパーボールすくい」「1円玉浮かし」「ペットボトルスロー」「かたぬき」「うまい棒頭のせ」などチャレンジし成功条件をクリアすれば景品がもらえるゲームである。

他の商店街では100円で商品を買っていたが、チャレンジを楽しむことを目的としたチャレンジゲームは、娯楽性が高く多くの地域の方、子どもたちに好評であった。地域の子どもたち延べ120人以上が参加してくれ、交流を深めることができた。

コミュニティモデルとしても象徴的なイベントとなった。

100円笑店街でチャレンジゲームを選ぶ地域の人たち



スーパーボールすくいは特に人気！



7月

6月中旬から子どもの居場所事業を知った子ども・ご家族からの相談、体験が増え始めた。

人数の増加から、建物の老朽化によって受入れ人数に不安があることが大家から伝えられ、協議の結果やむなく移転することとなった。

移転先として、商店街の一部に位置すること、人数の増減に耐える施設であることなどを条件に探したところ、熊本市内で最も賑わう上通商店街からつらなる通り沿いに移転することとなった。

これまでお世話になった居場所は、子ども達の協力のもと清掃活動を行った。7月末日に新しい拠点となる熊本市中央区上林町へ子どもたちとともに移転し、8月から始動することになった。

大部屋、小部屋3室、事務室などこれまでと比較して、子どもたちが様々な活動を同時並行的に行えるような施設となった。アクセスも格段により子どもたちの満足度は上昇した。

1学期最後ということもあり、阿蘇におでかけして動物と触れ合える体験を行った。

生き物との触れ合いは、癒し効果が高く、気分転換になることがわかっている。全員が楽しむことができた。

阿蘇ミルク牧場にて、動物と優しくふれあい、自然と笑顔になる。



8月

熊本市中央区上林町へ移転してきてから再始動となった。

コロナ感染が増加してきている時期でもあったため、感染予防の手洗い、消毒、体温測定、体調の問診などこれまで以上に徹底して行った。

地域的な特徴としては、飲食店他さまざまな商店が連なるところであるところから地域探検やリソース探しなど探索を何度も行った。

夏の暑い時期でもあり、熊本市は連日猛暑日が続いていたことから、コロナ感染だけでなく熱中症の対策も同時に行っていた。

子どもの活動としては、継続してレクリエーションスポーツや食育活動を軸に展開しながら、子どもたちの健康保持増進に努めた。

夏休み期間ということもあり、科学的実験的な活動を取り入れ、身近なものに科学的な興味関心をもつように工夫した。自ら手を動かして行う実験に楽しむ姿が見られた。

熊本市教育委員会の視察、スクールソーシャルワーカーとの連携などを行い、居場所での活動だけでなく支援機関との連携をしながらその子どもに必要な支援が行き届くように動くことができた。

洗剤をつかったオモシロ科学実験を体験中



9月

学校では2学期が始まり、不登校についての相談や訪問支援が増えていった。

また子どもの心境の変化もあり、再登校ができた子がいる反面、新たに地球子屋を利用する子どもも増えた。

一人ひとりが何ができるか目標を決めて取り組んだり、新しく来所するようになった子どもとコミュニケーションを深めていってここが自分たちの居場所である認識を育てていった。

活動としては、レクリエーションスポーツにバドミントンとデジタルと融合した HADO 体験も行い、未知のスポーツにチャレンジすることができた。

食育も子どもたちに定着していき、お菓子や料理を自ら進んで自信をもって取り組めるようになっていった。

少しずつ学習への意欲を取り戻すために右脳クイズやなぞなぞなど会話やワークシートを活用しながら知的な興味関心を高める工夫を行った。鉛筆を握ることが苦手な子どもも扱に慣れていき、問題を楽しむ場面が増えていった。

熊本地震を体験しているので防災意識をもつことを忘れないように防災訓練を行うこともできた。

この時期は特に子どもの体調や状態に寄り添いながら活動を展開した。

防災についてカードで学ぶ





レクスポーツ HADO にチャレンジ

料理も手馴れて行って揚げ物にもチャレンジした



食育は、自ら作り食べる行為を通して自信につながっていく。



右脳を鍛えるということで様々な課題に挑戦して、知的好奇心を引き出して学習への意欲を高めていった。



10月

秋を感じるために金峰山へフルーツ狩りへ出かけた。梨、柿、栗などを狩ることができた。食べ物を買う行為が当たり前の子どもたちにとって食べ物がつくられる現場を見て働く人がいることを実感することができた。

自ら狩った果物をつかって食育で活用したことでさらに思い出深いものになった。

プログラミング体験としてレゴロボづくりを行った。動画を見ながらつくりあげることができ、タブレットによって思い通りにロボットを動かすことに楽しさを感じていた。

一方、高学年の子どもたちは、自作PCづくりに取り組んだ。パソコンの一つひとつのパーツについて性能や価格についてリサーチして予算内でできるように発注した。

つくったPCを活用して、地球子屋の案内板のイラストを作成するなどPCの扱いにも慣れることができた。

繁華街である上林町にはリソースにあふれている。陶芸指導をしてくださる方とつながり、陶芸体験でコップづくりを行うことができた。

自分でつくったコップをつかって地球子屋で水分補給できるようになった。一つひとつの体験が、子どもたちの自信につながっているように感じている。

レゴロボをつくりあげ、プログラミングをして思い通りに動かす。



フルーツ狩りはデザートにして、秋の収穫を楽しむためにハロウィンパーティを行った。



コミュニティモデルとして地域の方に指導をいただき陶芸を体験することができた。



11月

子どもたちの関係性が様々な活動を通して深まっていき、子どもたちから地球子屋の宿泊合宿や福岡コナン展へのお出かけの要望が出てきた。

しっかりと話し合いの計画を立てて、準備をして取り組むというプロジェクトを遂行することができた。コナン展に向けて謎解きチャレンジを行った。体力が回復したと同時に精神的にも充実していることが伺えた。

これまでの知的な好奇心を育てていきたことがつながって学習意欲も高まり、地球子屋ではこの1年間の学習内容に取り組むことができた。

子どもによっては学年を先取りして取り組み自信につながっていった。

熊本では暑かった夏がようやく終わり、日常生活の中で外に出ても気持ちよい気候となっていた。熱中症やコロナなど外に出ることをなんとなく避けていた子どもたちもようやく公園遊びなど外に出ることを嫌がらなくなっていた。

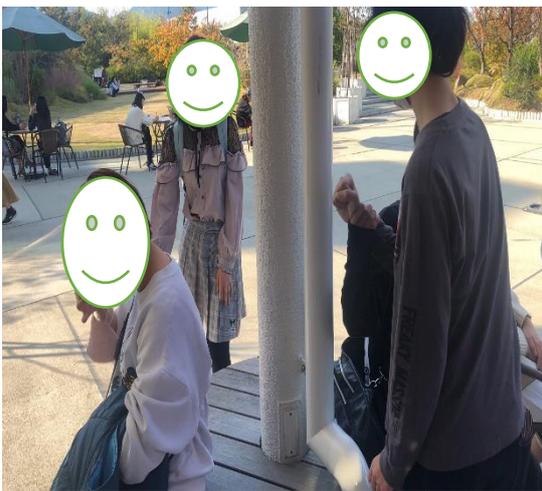
身体活動が増えていったために、体力にも自信がついて最終的には月末の福岡へのお出かけにもつながったと考えている。

中3学年の子どもにとっては、進路先を決める段階になってきて進路指導の時間をとり、必要であれば学校訪問の支援を行った。

施設を使い、脱出ゲームの謎解きチャレンジを楽しみました。



気候も過ごしやすく外遊びやコナン展を楽しんだ。



体力が充実してきたのは、毎週レクスポーツとしてバドミントンを続けてきたことが大きく影響している。



12月

地域リソースとして、ピアノや軽音楽を指導できる中川さんの協力を得られることができるようになった。

また中川さんは不登校の子どもにも理解があり、他のフリースクールも巻き込んで3月に音楽を楽しむコンサートを企画していると言う。

地球子屋もコンサート出場の希望があれば枠をつくるということもおっしゃってください。

地球子屋としては、子どもの意見を尊重して決めることとしているが、それ以前に楽器に触れたことがない子どもが多いため基礎的な練習から始め、その上で出場希望者を募ることにした。

MESH プログラムワークショップを沖縄の団体と共同開催という形で開催することができた。多様なセンサーを生活の様々なものに組み合わせて製品をつくりプログラミングをしていく過程を学ぶことができた。面白い体験に熱心に取り組むことができた。

中3生が5名ほどおり、進学のために遅れた学習を取り戻すことを目的にお泊り合宿を行った。通常の時間以降に、自分たちで夕食をつくり、その後は個別に学習に励んだ。コロナ禍で修学旅行などができなかった子どもたちにとって良い体験になった。

子どもたちが自ら発案する活動が増えてきており居場所以上の価値が出てきている。

MESH プログラミングワークショップ



「あ！いいこと思いついた」とひらめくこと、ありますよね。例えば、出かけている時にペットの猫がちゃんと餌や水を飲んでいるか心配していたんです。そんな時！MESH センサーをつかって、簡単にプログラミングをして水を飲むとアプリで確認できるようになりました。こんなふうに、思いついたことが実現できるオモシロいおもちゃのようなもの。



どう使う？ どう遊ぶ？それはあなたのアイデアしたい！！まずはこのブロック（MESH）を体験してみよう！

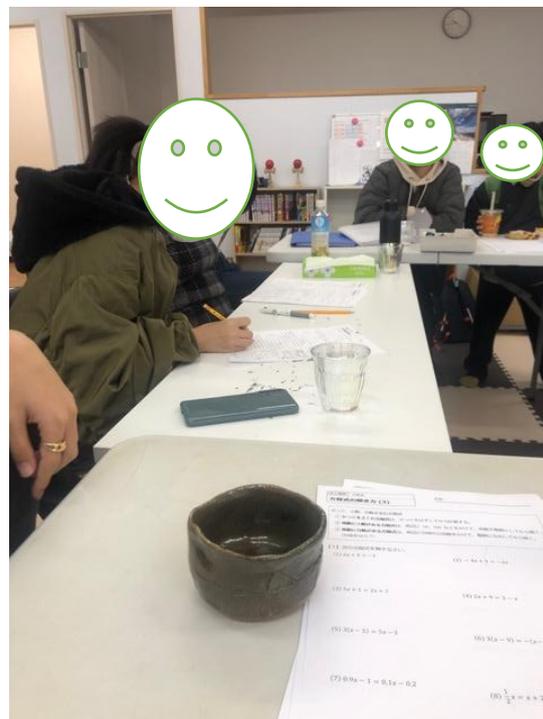
MESH センサーとは？
プレイステーションやスマホで有名な会社である SONY が、ものづくりとプログラミングを体験できる教材として開発したものです。
今回、日本財団と協働でオンラインの講座から直接学びます。フリースクール地球子屋で初開催！

カンドウ体験 ワークショップ

主催：フリースクール地球子屋
内容：オンライン講座によって、MESH を使ったプログラミングを体験します
時期：2022年 12月 23日（金）16：00～17：30
場所：フリースクール地球子屋（熊本県中央区上林町 3-34 上道ニコーポ2 階）
対象：小学生・中学生（5人程度）

参加申込：フリースクール地球子屋 加藤
連絡 080-4286-2999
メール freeschoolterrakoya@gmail.com

夕食後の学習の様子。自分たちで計画のため非常に熱心に取り組んでくれた。



1月

新年を迎え、地球子屋としての1年が始まる。子どもたちとともに初詣をし、書初めで改めて今年1年にかかる思いを表現してもらった。

地球子屋としては、中川さんの音楽プロジェクトが立ち上がり、3月に発表コンサートを行う予定となった。子どもたちに説明したものの楽器を始めただけの子どもたちにとってコンサートで発表することはハードルが高いようであった。そんな中、新しく通うようになった中3生のRさんはドラムの練習を続けておりコンサートへの出場も意欲を見せてくれた。

中3生はそれぞれ進学のために自宅での学習時間が増えていき来所する機会が減っていた。この時期以降は地球子屋の利用が減る者も出てくるし、新規で利用を始める子もいる。入れ替わりの時期で、活動も秋ごろほど活発にならない。

地球子屋は、2月にフラッグハント大交流会を控えており、その準備のために子どもたちも一丸となって協力してくれた。自分たちの日々の準備が大きなイベントへとつながるということで目標をもって作業に取り組んでくれた。

地球子屋として行事など絡めて短期的な目標をもちながら活動が進められてよかった。

中川さんの音楽プロジェクトの1コマ。マンツーマンの形で一人ひとりに丁寧に教えていただいた。



音楽を楽しむ中で気持ちが安定し、集中力を取り戻すことができた。それは学習への意欲にもつながったようだ。



2月

日本フラッグハント協会の方と昨年6月から企画をして、ようやく熊本・九州で初開催をすることができた。

また日本財団も交流会に向けて全面的にバックアップいただき、元日本代表サッカー選手の巻さんをゲストに迎えることもできた。

地域の子どもと保護者がチームに分かれ、作戦を立てながら相手チームの旗を取ることが目的のフラッグハントは運動量も豊富でありながらプレイに夢中になれる要素があり、30名ほどの参加があった。

お互い初対面にも関わらず、チームでよく話し合い、友だちづくりができた点やともに考え作戦を立てるなどチームづくりの基本を体験することができた。参加した子どもたち、保護者の方も非常に満足いただいた。

2月はバレンタインということで食育もお菓子づくりを熱心に行った。チョコレート菓子を毎週つくることができた。

7段の雛人形を飾る家庭は少なくなった。子どもの成長を祝うひなまつり。2月中旬に雛人形をみんなで飾ることができた。

食育のバリエーションとして「EATtheWorld プログラム タンザニア編」を実施した。ピラウという現在のピラフの原型となった家庭料理を習い、タンザニアについて話を聞いた。

初めてのフラッグハントのルールに熱心に耳を傾ける子どもたち。



いよいよプレイ。光線銃を避けつつ相手のフラッグを取りに行く。



最後は、みんな仲間になって記念撮影ができた。



3月

食育プログラムの一環で今月も「EATtheWorldプログラム」中国編を実施することができた。普段はお菓子や料理を作っているが、その国ならではの文化背景もあって話を聴きながら熱心に作ることができた。

ひなまつりは、主に女の子の節句であるが地球子屋としては子どもの成長を祝いたいと伝え全員でお祝いをした。

進学・進級を決めた子どもたちにとって3月は卒業など区切りとなった。何か自分たちでも企画したいということで荒尾市のグリーンランドへのお出かけの計画が浮かび、実施することができた。当日は小雨の降る中ではあったが良い思い出づくりができた。

3月末には音楽講師の中川さんが主催するコンサート発表会があった。地球子屋の子どもたちは、今回は出演という形ではなく参加者として一緒に楽しむことを選択した。当日は、他のフリースクールの子どもたちはセミプロで活躍する若手ミュージシャンの演奏を楽しんだ。

次回には地球子屋の子どもたちももっと上達して演奏ができるようになりたいと目標をもつことができた。

みんなで飾ったひな祭



グリーンランドを企画して思い出づくりができた。



中国の方と一緒に作った。



2) 子どもたちの変化

小学生ケース 1

小学生のHさんは、学校で馴染めずに、時にかんしゃくを起こすなど問題児として扱われていた。特に学校の時間に合わせて行動することが苦手で自分のペースで進めることにこだわりもあった。それゆえに級友からも指摘されたり、からかわれたりするなど傷つく体験も重ねてきており、地球子屋に来たときは、非常に憶病で何事にも消極的であった。

スタッフが熱心に関わりを続け、Hさんの興味関心に合った活動を積み重ねていった結果、人間への不信感もなくなっていき本来の明るさと積極性を取り戻すことができた。

そんなHさんが11月ごろから選択的に学校の授業にも参加するようになっていった。地球子屋で自分にもできることが増えていき自信を取り戻したことが大きかった。

3学期はさらに自らの選択として学校へ1日全ての工程に参加できるようになっていった。当面地球子屋と学校とを使い分けながら本人のペースで学びを深めていっている。

小学生ケース 2

Yさんは、3人姉弟の末っ子である。長女、長男さんはずっと家にいるためYさんも学校に行かないことを選択してきた。ところが時間を持て余すよ

うになってきて、母親とともに地球子屋の活動に参加するようになった。それまでずっとどこかへ出かけることがなかったが地球子屋にだけは毎日のように来ることができた。

地球子屋に来るようになり、を覚える、けん玉が上手になる、英会話ができるようになるなど自分なりに目標を考えて取り組むことができた。

その姿を見た長男さんも影響され、時々地球子屋に来所するようになった。長男さんの方が不登校期間が長く、保護者もどのように接してよいか思い悩んでいたが動き始めたことに驚きを隠せないようであった。

小学生ケース 3

保護者の仕事の都合で引っ越しを繰り返してきた中で、熊本の学校が馴染めずに学校に行けなくなったNさん。最初は長男さんがフリースクールに関心をもったが、妹のNさんが来るようになり友だちができたことで毎日来所するようになっていった。

学年も性格も異なっていたが気が合うことからとても仲良くなり、一緒に活動することが増えた。

仲良くなったMさんは学習意欲が高かったことに影響されて、自ら学習にも取り組むようになった。

3月には中学進学を控え、学校へ再登校の意欲も出てきている。熊本の地で地球子屋という居場所があることで再び学校への意欲が出てきたようであった。

中学生ケース 1

家では動画とゲームにしか興味もてなかったYさんは、地球子屋のレクスポーツバドミントンに熱心に取り組むことができた。身体活動には自信があり、継続することができた。最初は経験がなかったバドミントンであったが、継続していく中でみるみる上達していった。

ご家族、学校とも連携し、時にケース会議をもちながら周囲が同じ方向性をもちながら支援をしてきたことがYさんの生きやすさ、ストレスで疲れない環境へとつながっていった。

自分が成長できる実感をもつことができたYさんは、自信を回復し、1学期は登校できた。また進学への意欲も見せ、無事に全日制の高校受験に合格できた。4月からは高校生として新たな環境へと挑戦する。

中学生ケース 2

体調面に不安があったAさんであったが、少しずつ回復していき地球子屋の活動への参加を増やしていった。

地球子屋のスタッフや同年代の子どもたちとコミュニケーションがとれたことで自分の考えや価値観を見直すきっかけとなった。もともと自分の考えをしっかりと持っていたが、それゆえに自分と異なる価値観の人と衝突することも多かった。違う価値観の人との折り合いのつけ方を地球子屋で学んだことで自信となり、高校生活をしっかりと送りたいと考えるよ

うになった。

中学時代に途中で辞めることになった吹奏楽も地球子屋の音楽プロジェクトで活動することができた。地球子屋という居場所では学習面以外のことでの学びが大きかったと語ってくれた。

中学生ケース 3

他市在住の子どもであったが、近くにフリースクールのような施設がない点や、保護者がどうしても地球子屋に通ってほしいという願いもあり、Tさんを受け入れることとなった。

Tさんは、家内では動画ばかりをして、昼夜逆転になっていた。

しかし日中に地球子屋に通う目的ができたことで少しずつではあるが昼夜逆転も改善することができた。

地球子屋では、造形物をつくることに関心をもち、創造性をいかんなく発揮してくれている。自分のもつ世界を大切にしていることが他の子どもたちにも伝わり、尊重している。そのあたりがTさんにとっても心地よい居場所となっていると感じる。

中学生ケース 4

2学期から来所するようになったMさんは、学校では全く話をしない子であったが、地球子屋が居場所として定着したころから誰とでも話をするようになり、驚くほど変化を見せてくれた。安全・安心できる場を見つけたことで心を開くことができた。

3) 保護者、学校との連携

子どもの居場所をつくっていく中で保護者との連携や信頼関係が鍵となると考えている。

特に不登校の子どもたちを中心に受け入れてきた実績がある地球子屋は、子どもだけでなくご家族全体が回復していくことを目指している。

保護者に対して、いくつかの支援メニューを用意して取り組んでいる。

(1) 不登校学習会

不登校の子どもを理解することは、簡単なことではない。一人ひとりのケースは全く異なっており、他の子どもに当てはまるケースも我が子には通用しないことはざらにある。

そんな背景があるために、理解することは困難を極めるがそんな中においても対応の原理・原則がある。

その原理・原則を地球子屋流子育て術としてテキストにまとめ、学習会を毎月1回開催している。

子どもがどのような状態にあるかをまず5段階で把握することから始め、各段階において4つのステップを取り組んでいくことで子どもと見方がわかり、その子に応じた対応方法が見えてくるものである。

6回シリーズとなっており、半年間かけて学んでいくものである。これまで述べ数百人の保護者の受講があった。

(2) とともに育つ親の会

とともに育つ親の会は、何かを学ぶと

いうよりも、不登校になって孤立感をもつ保護者が集まり、今の出来事や気持ちと共有する。

他の保護者の意見や気持ちを聴くだけでも参考になることがあるし、また自らの誰にも言えないようなことを吐露することで気持ちの整理につながり、子どもと向き合えるようになると好評である。

学校との連携

教育委員会が2019年の文部科学省の方針転換を機に理解を示すようになっていった。毎年、地球子屋に視察があり、どのような場所であるか相互理解を深めている。フリースクールの数は増えたものの、真の意味で不登校の子ども支援を行っているのは地球子屋だけである。

先にも述べたように子どもが自らの学びを選択できるように促した結果として、再登校にもつながるケースが後を絶たない。(決して再登校をすることだけを目的にしているわけではないが)

学校とも連携し、時にケース会議に参加したり、相互で情報を交換して様子を伝えあったりして、ほとんどの学校では出席扱いとなったことを子どもの安心感にもつながっている。今後もよりよい連携の在り方を探っていきたいと考えている。

日本財団助成

事業名

熊本県熊本市における「子ども第三の居場所」(B)コミュニティモデルの運営(1年目)

実施団体

NPO 法人フリースクール地球子屋

作成者

加藤千尋

連絡先

NPO 法人フリースクール地球子屋

メール freeschoolterrakoya@gmail.com

電話 080-4286-2999